

赤石 定蔵(あかいし・ていぞう)

1、プロフィール

新聞社社長。言論人。陸羯南の新聞社「日本」に参加。メルボルン領事館書記生、日本銀行員を経て、羯南晩年の新聞社経営に尽力。後台湾日日新報社長。弘前銀行取締役東海健蔵は定蔵の兄。海軍造船少将東海勇蔵は弟。

<生没>

1867(慶応3)年9月 28 日～1963(昭和 38)年9月 12 日

<青森との関わり>

弘前藩士の子。はじめ東海姓だったが、母方の赤石家を嗣ぐ。同郷の陸羯南と共に新聞「日本」を支えた。

2、作家解説

父津軽藩士東海栄蔵昌幸(後昌雄)、母赤石いまの間に次男として生まれる。長男は後に弘前銀行取締役、弘前市議会議長も務めた東海健蔵であり、東海家の家督はこの健蔵が嗣いだ。定蔵は母方の赤石家が途絶えた形となったため、赤石家を嗣ぎ、赤石姓となった。また弟の勇蔵は後に陸の娘と結婚、海軍造船少将まで昇進する。

定蔵は弘前亀甲小学(現時敏小)を卒業後、工藤他山などがいた東奥義塾入学、この頃より英学が目覚め、1884(明治 17)年東京専門学校(現早稲田大学)英学科に入学する。在学中津軽同郷人会に出席した折、先輩陸羯南に面識をえる。同校卒業後一旦陸の新聞社「東京電報」(後「日本」)に入るが、91(明 24)年メルボルン領事館に書記生として赴任、東奥義塾内同人誌会報「学友通信」に「濠州遠征記事」「南天のまにまに草紙」を連載した。翌年に帰朝し再び日本新聞社に入り、97(明 30)年日本銀行に入行するも同行内の争議に巻き込まれるように辞職、3度日本新聞社に入り、会計責任者となった。新聞「日本」は周知の通り、明治 20 年代当時の欧化主義の風潮に警鐘を鳴らし、国民主導による時代精神を掲げた羯南の言論紙であったが、30 年代も後半に入ると陸の病軀と共に経営

難に陥るようになった。定蔵は金策に走り何とか新聞社を立ち直らせようと尽力、羯南晩年の日本新聞社を支え続けた。

1910(明 43)年定蔵は後藤新平の推薦で「台湾日日新報」の副社長に就任、台北へ赴き12(明 45)年には社長となった。定蔵はこの新聞社を強固な基礎を持つものに育て上げ、28(昭和3)年には『台湾日日三十年史』を刊行した。

言論によって時代精神を説いた羯南を物心両面にわたって支えサポートした定蔵の姿勢には、先輩の志を次代に継ごうとする強くも温かな気概が感じられる。この印象は当時の、現代では考えられないほど強固であった〈同郷〉という絆の存在によるかもしれない。